令和７年１月２０日　*vol.40*

# 「震災追悼行事で生徒に伝えたこと」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　震災追悼行事で生徒に伝えたこと

最初は原稿を書いていたのです。阪神淡路大震災から３０年となる節目の追悼行事。でも、どれだけ言葉を尽くしても『震災を経験した私から、震災を経験していない皆さんへ』となってしまうのです。説教くさいというか、昔話を後世に押しつけていると言うか、何処か上からの目線です。何度も書き直してはみたものの、結論は「これじゃあ、何も伝わらないな」との思い。では、今を生きる生徒たちに、私が感じたあの切迫感を伝えるにはどうすればよいか。辿り着いた結論は３０年前の自分に頼ることでした。

阪神淡路大震災のあった年、僕は高校２年生の担任をしていました。当時の僕は学級通信を書くのが大好きな担任でした。当時のファイルを見ると、震災のあった当日の「１９９５年１月１７日付け」の学級通信があります。でも、それは準備していたものの、朝５時４６分にマグニチュード７，３にして、６４３４人の生命を奪う地震があり、誰も登校ができないままに学校は休校。結果として配ることができなかった幻の学級通信です。そして次の号の日付は１月２５日となっています。それが震災後の初の登校日ですから、１週間は学校を開けられなかったということになります。

今日はこの１月２５日付けの学級通信の一部を読ませてもらいます。２７歳だった僕が、１７歳の生徒に向けて書いた通信です。タイトルは『今、いちばん考えておいてほしいこと』

地震の直後、僕は完全にタンスの下敷きになっていた。部屋中のタンスが全て僕に倒れかかって、そのうちの一つは頭を直撃していた。やばいな、そう思いながらもそこから抜け出すのに随分と時間がかかった。妻は殆どパニック状態になりながら、その脱出を助けてくれた。僕らはとにかく手探りで車のキーを見つけると、すぐに暗闇の中へ出た。古い木造の妻の実家が気になったからだ。

車を走らせる。人々が右往左往しているものの、尼崎市内は比較的落ち着いていたように思う。橋を渡り、西宮へ。そこで僕らはすっかり崩れきった妻の実家を見つけた。泣き叫ぶ妻の肩を叩きながら、車を止めて降りた。庭におとうさんがいた。おかあさんはまだ家から出られないでいた。

『いや、なんとか僕一人でも出せる。それより泰子（妹）を病院に連れていったってや』そう、おとうさんが言う。泰子はあちこちから血を流している。タオルで縛って、車に乗せ、病院を探した。

兵庫医大の大学病院なら空いているだろう、そう考えて南を目指すけれど甲子園口の駅前は、倒壊したビルが塞いでいて通り抜けることができない。僕らは仕方なくＵターンをする。僕の足はようやく震えだした。泰子の血は止まらない。僕らは行き先を市民病院に変えた。亀裂の入った路地をいくつもすり抜け、ようやく病院に着く。でも、本当の意味での辛い時間は、その時はじまった。

明かりのつかない病院の暗い待ち合い室はたくさんの人だかり、そこで僕らは順番を待つ。次々と人が運ばれてくる。泣き声と叫び声が交錯する。『助けてやってください‥』『誰か、血を止めて下さい‥』『お願いします‥』そんなパニック状態の中で、一人二人と亡くなっていかれる。

僕は泰子の腕などに巻いたタオルを時折緩めては、またきつく縛る。なんとか血を止めなくちゃいけない。お医者さんの姿は僅かしか見えない。そこに患者は長蛇の列。順番が来るまで何時間かかるか分からない。果たして、応急処置をしてもらった時はもう昼時だった。泰子の血は止まった。でも生死のやりとりをさんざん見せつけられた僕らの目は真っ赤に腫れていた。いったい、これからどうしよう、僕らはそんなふうにようやく途方に暮れることができた。

妻の実家に戻ると、無事におかあさんも助けられていた。みんなで近くの親戚の家に避難する。そこでおにぎりを食べさせてもらった。『家財道具を出さなあかんなあ』そんなふうにおとうさんが言う。そこで僕らはもう一度、ほぼほぼ崩れてしまった妻の実家に戻る。形の残っているところから、出せる家財道具を取り出す。柱がきしむ度、背筋が凍る。

そんな作業が５日続いて、土曜日には終わった。その日の午後、家は急に揺れだして、やがて完全に崩れてしまったのだ。一階と二階とを繋いでいた一本の電線、それを切って２０分後のことだった。

寒くて暗い病院の待合い室で最後のため息をついて、亡くなっていった多くの人のことを思う。完全に崩れてしまった妻の実家の跡を見ながら、その中から生を掴みとった妻の家族の奇跡を思う。生と死が紙一重であること、今の僕にはよく分かる。生きているということを、心から感謝できる。そして君らが生きていることを、心から感謝している。

月曜日、君らの顔を見て、本当にホッとした。でも僕は随分と傷ついている部分もある。そのことについて書く。僕はこの地震のあとで、うまく笑えなくなっている。それは単にたくさんの人が亡くなっていくのを見たからなのか、それとも家と職とを同時に失った妻の実家のこれからを思うからか、それは分からない。でも、本当につらい。

水道とかガスとか電話とか、そんなのはどうでもいいねん。今はただただつらいねん。とにかく僕は随分と弱っている。いや、言い換えれば僕でさえ弱っている。

もちろんこの地震で、なんの痛みも感じなかった人がいても、別に僕に責める権利なんてない。でも、君らの周りには親を亡くした人がいる。兄弟を亡くした人がいる。おじさんを亡くした人もいるし、おばあちゃんを亡くした人もいる。家を失った人もいる。教科書とか制服とか、そんな自分の持ち物全てをなくした人がいる。家の人が職を失って、生活の基盤を失った人もいる。

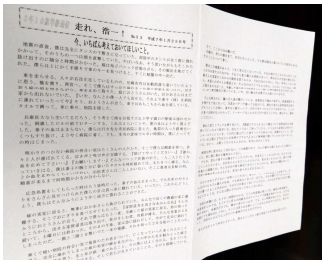
本当に色々な人がいる。だからせめてデリカシーを持ってください。君らの一人一人がどんなことを思うか、そんなのはもちろん個人の自由。でも何気なく言った一言でも、それが聞いている人をどれだけ傷つけることがあるか、それだけは覚えておいてください。人の心を平気で土足で踏みにじるような、そんな人間にだけはなってほしくないねん。

学校の再開には、もう少し時間がかかる。どうか有意義に使ってな。地域の体育館や水道局なんかは、家を失った人の避難所となっているけれど、もうすでに君らの同級生がボランティア活動を始めている。でも、まずは家の手伝い。水を運ぶ、それだけでも随分と役にたつはず。

そして、もしも時間が余ったら、自分の母校にでも顔を出してみい。そこにも君らの力を必要としてくれる人が必ずいる。君らだって、学校なんかよりよっぽどいい勉強ができるはずだから。
ともあれ、君らが生きていて本当によかった。こうして再び会えて、本当によかった。僕はもうしばらく家や妻の実家の片付けを続けます。お互いに人間的にひとまわり大きくなって、１週間後の次回の登校日、来週月曜にまた逢いましょう。

以上が僕の当時の学級通信です。阪神淡路大震災により僕のクラスの生徒のうち１４人が家を失いました。でも、みんな生きていてくれました。妻の家族も生きていてくれました。そのことを心から喜んだ一方で、多くの方が亡くなられていくのも僕は目にしました。それがちょうど３０年前の今日の出来事です。
どうか今ひととき、亡くなられた方々のご冥福を皆でお祈りできたらと思います。

対面でなく、放送機器を用いた集会だったので、生徒の反応が私には解りません。でも、形式ばったものよりは伝わる何かはあったかなと勝手に推測したりしています。
生きることを強く望みながらも叶わなかった方々がおられたということ、何の前触れもなく生命は奪われることがあるということ、それだけは僕は伝えたかったのです。



令和７年１月２７日　*vol. 41*

# 「どうかサクラ咲きますように」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　情報交換会での話

先日、県教育委員会が主催する『自殺予防教育担当者研修会』がありました。県内でも近年、生徒の自死が増えています。そこで、「心の危機に気付く力」と「相談する力」を生徒に身につけてもらうことが喫緊の課題となっているため、県内の各校の先生方が集まり、ともに学ぶ研修です。

去年までの私はそういった研修を主催する側であり、出席したかったのですが当日は他の会議があるため、参加は見送りました。ただ、講師の方々はこれまで私がお世話になった方ばかりで、夕刻には文部科学省の方もまじえての情報交換会をするとのことで、「そちらの会だけでも参加を…」と誘われました。

その会の席上、「何か自殺予防の取組をしていますか」と問われます。私は「実は生徒集会などでは『生きて、今日もこうして集まってくれて有り難う』的な話しかしていないんです…」と打ち明けました。ある校長先生からは「加古川東でそんな話をするんですか」と驚かれましたが、皆さんが知ってのとおり私はその類いの話ばかりですよね。周囲の反応に戸惑っていると昔から県の『いじめ基本方針』の策定等で、中心的な役割を果たしてこられた大学教授が笑いながら言ってくださいます。「新谷さんらしいよな」と。

## ○　３年生の学年集会での話

そんな私ですが、共通テストの前日、77 回生の学年集会で「激励の言葉を伝えて欲しい」との依頼を大西先生から受けました。校長になって初めて、生命や生き方以外の話を生徒にすることとなったのです。

先ずは皆さんが今日集まってくれたことに感謝します。また、私に時間をくださった３学年の先生方に感謝します。40 年近く前に共通テストの前身となる試験を受けた僕から、皆さんに少しだけ話をします。

僕も当時は高校３年生でした。いきたい大学がありました。でも、そこに出願するためにはその前の共通一次試験で一定の点数をとる必要があります。国語、数学、英語と理科２科目、社会２科目。年明けからはずっと緊張しっぱなしでした。なんせいわゆる現役生です。準備万端という気分ではありません。

試験会場に入ると、広い教室内には多くの受験生がいます。知らない顔ばかりですが、みな賢そうに見えます。休憩時間になると知っている者同士で「できた、できた」という話をしています。自分だけが「できない子」のように思うことが何度もありました。でも、覚えていてください。彼らは敵ではないのです。

山登りと同じです。皆それぞれ、目指す頂上は違うのです。大切なことは誰かとの比較ではなくて、自分が目指す頂上に一歩ずつ近づいていくことなのです。できそうな問題をしっかりと解く、それだけで頂上は近づいてきます。そんなイメージで丁寧に取り組んでもらえたらいいな、そう思っています。

皆さんにはこうして集まってくれる仲間や、心から皆さんの成功を願う先生方や保護者の方がついています。「自分を試されている」というより「自分の思いを試している」そんな気持ちで会場に向かってくれたら嬉しいな、という言葉をもって皆さんへの激励の言葉とさせてもらいます。がんばってね。

312 人が挑む共通テストを前に、清流百周年記念館に集まってくれた 77 回生。「しっかり準備してきたんだから、皆さんは大丈夫です」と池田先生はあたたかく力強い太鼓判。大西先生はどんな願いも叶うというブラジルの最強の呪文『シンパティアス』を披露。皆で唱えてみました。大澤先生からは「困った時は大切な人の笑顔を思い出すこと」との言葉。それぞれ大切な人、いますもんね。

果たして、好スタートを切れた生徒が多いようです。どうかサクラ咲きますように。

令和７年２月３日　*vol. 42*

# 「探究デー、お疲れ様でした」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　探究的な学びのシンカ

以前の通信に書かせていただきましたね。新人指導主事の私の担当は発展的統合などといった教育行政的な仕事ばかりで、教員出身らしい仕事と言えばＳＳＨの指導くらいであったと。そのうえ当初、県立の指定校は神戸高校１校でした。今や兵庫県全体の指定校は全国２位の 16 校です。隔世の感ありですね。

ＳＳＨの面白いところは、科学や技術の分野で国際的に活躍しうる人材の育成を目的とし、学校独自の探究型のカリキュラム開発が行えるところです。具体的には「総合的な学習の時間(当時)」や「理科課題研究」などの時間に学校裁量の探究科目を設定することで、従来の知識伝達型の授業からの脱却をめざすことができたのです。東高も平成 17 年に申請書作成にとりかかり、国のヒアリング等を経て平成 18 年に指定校となりました。と言っても、当時は理数コースの生徒のみ、理数教科のみを対象としていました。

**だから先々週の『探究デー』の光景は驚きとともに喜びでした。普通科の１、２年生全員が丸 1 日かけて探究的に学ぶ時代が来るとは、20 年前の私には想像すらできなかったことです。多くの先生方の粘り強い取り組みが、探究の学びをこうした裾野の広いものにしたのですよね。学びは進化、深化しています。**

体育館に集まり、それぞれの班の研究成果をポスターにまとめて発表した２年生の姿も実に頼もしいものでした。個人的には「セアカコケグモの生息分布」や「学生食堂の利用促進」、「食物アレルギー患者のための外食用アプリ開発」、「教科毎のイメージカラー」等が興味深かったですね。

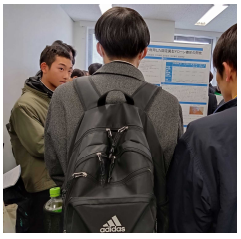
視察に来られた他校の先生から話しかけられます。「もっとも印象的なのは、生徒さんの学ぶ表情ですね。実に楽しそうです。あの光景を見られたこと、くわえて傍士先生から探究について詳しくお話を聴けたのは収穫です。本校でもさらに探究的な学びを進めていけそうです」と。傍士先生は探究の先駆者ですからね。お話ししてもらえて何よりでした。

こうして校内にいる者としては「うまくいっている」と思える東高での探究的な学び。それでも今年はひとつ大きな山がありました。ＳＳＨ第４期指定の３年目と言うことで、国からの中間評価を受ける年なのです。ここで「今ひとつの評価」を受けるとこれまで 20 年近く享受してきた国からの支援が止まってしまうこともあります。だから昨年９月のヒアリングの日は、東高にとって大きな勝負の日と言えました。

資料はいつもながら新先生がまとめてくれました。東高の生徒の学びと先生方の支援・指導が見える、いい資料です。となると不安材料はひとつだけ。文部科学省から事前に届いた留意事項への対応のみです。

**ヒアリング当日は、本事業の取組状況について、原則として学校責任者から説明をお願いすることとなります。その後、質疑応答等については、学校からの回答は原則学校責任者とする。**

45 分のヒアリングのうち県教委が説明する２分を除いた 43 分間。どんな質疑応答であったかは覚えていません。ただ、その結果は先週末に届きました。詳細は次回の職員会議でお伝えしますが、対象校 47 校のうち『ねらいの達成が可能』と評価されたのは７校のみで、東高の名前はその中にありました。ちなみに他の６校は東高より指定期間の短い学校ばかりです。進化、深化を長く続けることの難しさ故ですね。



嬉しいよりも私はただ安堵感でいっぱいでした。ちなみに新先生はこうした業績が認められ、本日午後に東灘区文化センターで開催される『兵庫県優秀教職員表彰式』に出席されることとなりました。これは東高としても嬉しい話です。新先生、おめでとうございます。

令和７年２月１０日　*vol. 43*

# 「こころの温度が少しあがる」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　ある朝、驚いたこと

ある朝、出勤して、いつものように校長室の扉をひらいたとき、通りかかった生徒が訊ねてくれました。「校長先生。これ、なんですか？」　４月以来、校長室の扉に１週間の自分のスケジュールを記したプレートをかけていましたが、さらに１枚新たなものが設置されていたのです。すべて写真のなかの私が何かメッセージを伝えようとしています。全部で４枚。

『１日いません』『今はいません』『大事なお仕事中』そして『生徒ＯＫ』。誰が作成したのかはすぐにピンときました。台湾研修に一緒に行った１年生の生徒たちですね。「先生向けのスケジュール表だけじゃなくて、私達向けのも欲しいんです」と言っていましたから。

思えば当初は扉を全開にしていました。すると有り難いことに、顔を覗かせて挨拶してくれる生徒が少なからずいましたし、校長室に入ってきて話をしてくれる生徒もいました。そこから夏と秋が過ぎ、さすがに冬の廊下からの空気があまりに冷たいので、最近は扉をほぼ閉めています。「それだと、いつ校長室に遊びにいっていいか解らなくて困ってるんです」とのこと。この実力行使について、とりあえず認めることにしました。写真入りは気恥ずかしく、遊ばれている気もしますが、そんなに嫌ではなかったのです。

## ○　そう言えば…

通信 36 号に掲載させてもらったオープンハイスクール参加者の感想をまとめたＡＩ要約図。「わかりやすいものを作っていただき、有り難うございます」そう藤井先生に伝えると、「いやいや、アンケート用紙に書かれたことをすべて打ち込んでくれた、阿野先生の御蔭ですよ」と返されます。

修学旅行の主担当であった岩本先生に「無理したらあかんで」と言いながら仕事を引き取っておられる上田先生に「有り難うございます」と伝えると、「放っておいたら彼は頑張りすぎるから、僕はできることを手伝っているだけですよ」そう笑い飛ばしてくれます。その上田先生が体育館でひたすらバドミントン部の生徒を鍛えているとき、隣で津國先生は散らばったシャトルを黙々と拾い集めていましたっけ。

腕を組み、バスケットボール部の生徒に熱く指導している松下先生の隣の椅子には生徒を優しく見つめる鵜飼先生がおられます。前川先生はコート周りを歩き回りながらルーズボール等に注意を払っています。あの三者三様に生徒の活動を見守る姿が好きな私は、時間があると体育館を覗いてみたりします。

震災追悼行事のあと、和田先生が伝えてくれます。「僕みたいな者がこんなことを言うのもなんですが、校長先生の今日の話はすごくよかったです」と。上岡先生は放送部の生徒とともに校長室に来てくれました。生徒がお願いしてくれます。「先生のお話、心にぐっと迫るものでした。番組にさせてください」と。

仕事納めの日、わざわざ校長室に寄ってくれた榮先生は「良いお年を」と声を掛けてくれました。仕事始めの日は「今年もお願いします」でした。こういったことすべてが私のこころの温度をあげてくれます。

77 回生の卒業認定会議が終わり、第３学年に在籍する 315 名全員の卒業が見えてきました。主任の大西先生をはじめとする学年団の先生方に深く感謝するとともに、遠隔授業を始めた頃から生徒にしっかりと寄り添っておられた加藤先生のことを思います。考査の時などは無事に登校できるかを心配して、玄関でひとり佇んでおられたその姿を思い出します。ああいった光景に私がどれだけ勇気づけられたことか。

**気づけば今年度も残りふた月です。人より賢いわけでもなく、何か特別な武器も持たない私ですが、生徒や先生方にこころの温度をあげてもらいながら、ここまで辿り着きました。日々、感謝しています。**